

生涯学習を視野に入れた情報教育



放送大学 教授
川 合 慧

情報教育は他の教育分野とくらべて著しく後発であるが故に、その重要性の認知が低く、教育内容についても多くの否定的な意見が盛んに提示され続けているのが現状である。その中で例外はいわゆるパソコンスキルと情報モラルであろう。前者は情報化社会を生きてゆくための能力として、後者は「社会と揉め事を起さない」ための要素として、個人としても企業としても重要であると認められてきたからである。この2項目は、生涯学習とも相性がよいが、生涯に渡って情報技術を使い続けていくための能力のごく一部であることに注意する必要がある。

このような、一般に広まっている情報教育像が不完全かつ誤っているものであることは、様々な場で議論されてきたが、一般的な合意を得るまでにはまだ相当な時間を必要とするであろう。とくに生涯学習を視野に入れた議論は、はなはだ不十分な段階にあると言わざるを得ない。

本特集では情報教育について、とくに生涯学習を視野に入れて考えることを目標とした。生涯学習には学校教育とは異なる教育上のファクターも数多く存在するが、情報という分野の場合には、まず対象とする教育内容の議論が欠かせない。学校教育における情報の扱いは、様々な経緯をたどった挙句、高等学校における新教科「情報」として形をあらわした。2003年から実施されているこの教科については、その実施方法、教育内容、教育の環境、はたまた教育する側の質などについて様々な議論が巻き起こってきた。しかしながらその必要性の一般的な認識と関係者の努力により、次の学習指導要領においても形を少し変えて存続している。本特集の論文では、まず「初等中等教育における一般情報教育」(久野)についての紹介が、諸外国の様子を含めて行なわれる。ここでは、情報教育の必要性から日本における課題、これまでの経緯、現実の問題点、展望などが、相互の関連性をまじえて解説される。次に「大学における一般情報(処理)教育」(河村)についての学会等の活動が紹介される。一般情報教育の知識体系(GEBOK: General Education Body of Knowledge)の構成と、それを基とした実際の科目のシラバス提案が中心になる。学校教育から社会へのつなぎという意味合いも強い。さらに「情報フルーエンシー」(辰己)では、リテラシーを一歩進めた概念であるフルーエンシー(fluency)の考え方の紹介と、それをもとにした、高等学校の教科「情報」用教科書の内容検証が語られる。“生涯に渡って情報技術を使い続けていくために十分な能力”と定義される情報フルーエンシーは、適切な扱いをすれば生涯学習と強く関係するものであると思われる。

情報教育の中でとくに一般受けのよい倫理の関係では、「情報倫理教育」(中村他)の論文がある。ビデオクリップ集の形で制作した教材をめぐる種々の議論が展開される。諸外国の状況比較も興味深い。大学での情報教育の事例として、北海道大学における状況の解説論文が続く。「大学人」としての情報教育者の、理念の議論ばかりでは済まない、具体的な教育枠組みの設計や教育内容の検討に関する苦労がにじみ出る内容となって

いる。今後は、これらに対応した「生涯学習」用のシステムや内容についての検討と実践が必要となるのであろう。

『『生涯学習としての情報教育』を支えるフィンランドの図書館の特徴』(大橋)では、生涯学習を積極的に進めているフィンランドにおける教育の仕組みの紹介と検討が行なわれる。フィンランドについてはPISAの成績のみが語られることが多いが、国力向上のために情報教育と生涯(成人)教育への力点を置いていることが、種々の事例を使って述べられている。わが国の情報教育と生涯学習を考える上で大変参考となる論文である。

生涯学習については、政府による方針が法律の形で示されているものの、定義や施策の具体性に欠けているという指摘もあり、実際的な研究レベルの活動もまだまだ不十分な段階であると言うことができる。情報教育は、ものの考え方と言う側面と実際の操作や処理についての知識・技能という側面の両方をもっており、生涯学習の対象として極めて重要であると同時に、その具体化にはかなりの困難を伴うことは必定である。本特集の各論文が、この問題を考える上での参考と指針として役立つことを願っている。